



未来創造Ⅱ 2年生 先輩を囲む会

◇ 2年生 課題研究発表会 英語発表

日時：平成30年1月18日(木) 第6・7限

本校出身で、全国各地で活躍されている先輩方にご来校頂き、それぞれの仕事や人生観について語っていただきました。

生徒は、第6限・7限のそれぞれにおいて異なる講師の方からお話を聞きました。



【講座1】講師：吉田 研 先生（刀匠 関伝日本刀鍛錬技術保存会刀匠部会）

刀の鞘や、製鉄の際に用いる鉋石や砂鉄などを実際に持ってきてくださり、イメージを持ちながらお話を聴くことができた。

○刀の歴史

「刀」＝人を傷つけるための武器だという認識が強いだろう。しかし、外国文化で戦闘の道具といえば「盾と矛」という順で言われるように、戦いにおいてはまず「守り」が優先される。「刀」もそれと同様、その主たる役割は「守り」であると考えられる。現代でも皇室で子どもが生まれると「お守り刀」を贈る習慣があることが例として挙げられよう。

幸い戦闘の必要がない現代日本において、「刀」は必要がないものと思われるがちである。しかし、現代では美術品として重宝されている。美術品として認定された刀は県内に8万本以上あり、この数は近隣のどの県よりも多い。自分の作ったものが登録されると、その刀は刀鍛冶の名とともに、一生世界に残る。そのため、生涯恥じることはないよう、こだわりを持って一本一本を打っている。

○様々な教科と関連がある

日本刀は一見私たちの生活とはかかわりがなさそうだが、様々な教科と関連を持っている。たとえば、国語においては「鍛錬」や「しのぎを削る」「切羽詰まる」「やきを入れる」などの語源はすべて刀の製造工程や刀の具体的な部分に関係している。社会においては、刀の形の変化に、元寇など敵の武器の変化など、歴史の動きが大きく関係している。また、理科では、製鉄や鍛錬などの製造過程が化学と密接に関連している。



○誰かはどこかで関わる「日本刀」

関高校に通う人たちの多くは、この先の人生、なんらかの形で「刀」に関わる機会があるだろう。刀鍛冶はもちろん、刀の製造過程に関わるその他の職人さんとして活躍している関

高OBの方もたくさんいる。また、刀の製造に関わらなくても、報道関係の人が刀について取り上げたり、写真好きな人が鍛錬の様子を撮影したりするなど、様々な仕事・趣味で「関の刃物」に関わる機会があるだろう。関市民であることに誇りを感じ、刀について少しでも興味を持ってくれる人が増えてくれることを願う。

<<生徒の感想>>

関が誇る日本刀の鍛錬の方法や、日本刀発祥の慣用句の詳しい説明など、様々な話を聞くことが出来ました。また、今後もし海外に出た時に日本刀についてどう説明するのか、アドバイスを頂けたので、参考にしたいと思います。僕は日本刀に関しての知識はあまりありませんが、興味は持っているので、今いるこの刃物の町関で刀に関して知識を身につけていきたいと思っています。

【講座2】講師：石原 進 先生（静岡大学大学院工学領域数理システム工学系列 准教授）

大学の先生の仕事について、やりがいについて、自分が高校生だった頃のお話をしてくださいました。仕事として大きく授業・研究・運営があります。

授業では、講義・演習・ゼミ・論文指導・プレゼン指導を通して学生と関わっています。研究では、自動車間の無線通信によって事故を防止するための無線ネットワーク技術に取り組んでいます。リアルタイム画像カーナビを目指して、できる限り小さな無線通信機とコストでドライバーに「その場所の情報」を提供し、周辺の状況を細かく把握して事故を軽減することを目指しています。自動隊列走行のネットワークシミュレーションで物資輸送の経費削減が可能かどうか、下水管検査で下水管の中に人が入らないで作業ができるようなセンサーネットワークの研究、携帯端末の動きによる個人認証など、私たちの生活と密接に関わっています。

運営としては、主に研究のための資金集めがあります。

大学教員・研究者のやりがいには、「世界中のすごいやつ」「面白いやつ」と交流ができること、自分の名前で本や論文が世に出せること、学生の成長を見ることができること、世界中を旅できることがあるとお話してくださいました。



<<生徒の感想>>

先生の方からぐいぐい来てくださる、気さくな方で、お話も楽しかった。研究者という方がやっている事には元から興味があった。しかし、研究そのものへの出資が渋られているため、生活が大変であるなどと聞いたこともあり、あまりいいイメージは持っていなかったけれど、先生が率直に、研究が楽しいとおっしゃっていたのを聞いて、更に興味がわいた。

【講座3】講師：多田 明夫 先生（神戸大学大学院農学研究科食料共生システム学専攻准教授）

大学での研究内容、その研究を将来やりたいと決めた時の思い、進路決定をする上で大切にしてほしいことなどを、今に至るまでの経験を踏まえながら話していただきました。

特に、進路決定をする上で大切にしてほしいこととしては、

- ・「自分の性格よく知ること」

自分にとって、どんなことが向いているのか、何が向いていないのかがわかっていないと、自分の進みたい道を決めるのは難しい。

- ・「社会認識 自己と社会の相対化」

社会の中でどういう問題があるのか、どうしたら社会が良くなるのか、などという社会貢献の面で自分の進路を考えてみるのも良い。

- ・「具体的に何をしたいのか、大学に入って何を勉強したいのかをイメージする」

大学に入学することがゴールではないので、大学に入って具体的に何をしたいか、学んでいきたいかをイメージし、それを進路決定する際のモチベーションにする。

という点でお話をしていただき、メモをとる生徒が多くみられました。

また、志望校に合格する方法がある、ということで、「これ以上やっても無理や！というくらいの努力をすること」と紹介してくださり、まだまだ甘く考えていた？生徒にとっては心に強く残った言葉ではないかなと思います。



<<生徒の感想>>

何年後にどうなっていたいかを考えて、そのために今何をすべきなのかというのを明確にして高校時代を過ごしていらっしやったところが凄いなと思いました。自分のやりたくないことは続けることが難しいと思うけれど、数年後の自分がどうなっていたいかを十分考えてそのために今出来ることを頑張りたいです。先生には職業選択のことや大学がどういうところなのかを詳しく説明して頂けたので、とても勉強になりました。

【講座4】講師：福田 恵介 先生（福田刃物工業（株）代表取締役）

学生時代に無気力で後ろ向きの性格だった自分が、前向きな人間になり、今、仕事が楽しくて仕方ない。様々な開発秘話やテレビ番組秘話と共に、どのようにして人生（仕事）を楽しむようになったかのお話をしていただきました。

（株）不二越工具事業部の開発設計時代で、人が嫌がる夜勤に自ら希望したのは、今までの自分を何とか変えていこうという強い意志と、積極的に行動したい気持ちの表れでした。失敗ばかりで落ち込みそうになっても逃げなかったことで得た教訓として、次のようなことを強調されました。

まずは、逃げずに「正面突破」に心掛けること、そして「逃げずに努力してたくさん失敗して、自分で乗り越える体験を繰り返す」ことが大切で、「正面突破」に心掛け努力することで、「確かな自信（実力）」が身に付き、「前向きな思考」になれると、「チャンスが増える、巡ってくる」ことを強調されました。

現在の関市の福田刃物工業（株）において、トヨタ自動車（株）の依頼で「クリアカッター」を発明し、特許取得。その「クリアカッター」は2011年、小木野科学技術振興財団にお

いて、最優秀賞を受賞したことのお話しと実物の披露。

次に2014年 NHK番組「超絶 凄ワザ!～前人未到の切れ味を目指せ～」にチームリーダーとして出演したVTRの上映と解説をしていただきました。これは鉄パイプをいかに変形させずに刃物で切断できるかを出場2チームで競うものでした。上映前に本人は「結局この勝負には負けてしまいました」と言われましたが、競ったチームには見事に勝利していました。なぜ負けたって言ったのか分からなかったので尋ねてみると、「相手チームには勝利したが、鉄パイプに負けた」と言われました。確かに切り口は綺麗でしたが、鉄パイプが楕円形に変形していたことに納得がいかなかったそうです。いつか必ず綺麗な円形の切り口になるカッターを作りたいというのが、やはり職人の拘りなのだと感じた次第です。

生徒もテンポいい展開に退屈せず、興味をもって集中できた、とても良い講演でした。



<<生徒の感想>>

逃げるのではなく、色々なことに積極的に取り組むことで、人として成長していけるのだと、分かりました。どのような問題に直面しても、その壁を乗り越えていけば「確かな実力(自信)」となり、「前向きな思考」をしていけるように変えられると思うので、自分に自信をもって失敗を恐れず、それを土台にし、より良い自分になれるように変わっていきたいです。

【講師5】北村 隆幸 先生 (NPO 法人せき・まちづくり NPO ぶうめらん代表理事)

「まちづくりを仕事にする」と題して講話して頂きました。まちづくりの面白さに魅了され、その経験や知識を生かし、2007年に関・まちづくり NPO ぶうめらんを設立されました。関市の地域活性化のために、いろいろな活動をされています。関市の高校生は3000人いますが、その7割は高校卒業後、地元を離れてしまいます。関市に戻ってきてもらうためには、「高校生に関をもっと好きになってもらいたい。関の魅力を知ってもらいたい。」という思いで活動をされています。



ぶうめらんの目標は、①郷土愛を育む、②市民が生き生きと暮らす市民社会を実現する、③元気で地域を支える企業を育成する、④若者に関市で働く意欲をもってもらう、です。こうした目標の実現のための取り組みの1つとして、地域企業と高校生と NPO の協働を推進されています。関高校の文化祭などで「関牛乳に何味を混ぜたらいいだろう?」という投票を行いました。高校生のアイデアを取り入れて、3位になった「味噌牛乳」の商品化が実際に進められたそうです。

こうした高校生のアイデアを今後も増やしていきたいとおっしゃっていました。何人かの関高生も、高校生記者として「高校生ぶうめらん」で活躍しています。講座では、「まちづくりの仕事を体験してみよう」ということで、えんたくん(円卓)によるワールドカフェを

体験しました。膝の上に丸いボードを載せて、膝をつきあわして、自由な発想を述べ合うものです。「こういう自動車学校なら通ってみたい」、「ぶうめらんに〇〇があればもっと読んでみたい」というテーマに関して、グループでお互い自由な意見を言い合って、楽しい会になりました。最後に「まちづくりとは…?」という生徒の質問に対して、「提案だけでなく、成果を出すこと」と話された言葉が印象的な講座となりました。

<<生徒の感想>>

グループで話し合いながら交流を深めることができ、良い経験になりました。この講座を聞く前には、『ぶうめらん』にあまり興味はなかったのですが、今回の講座を経て、いつか『ぶうめらん』に関わる日があったら進んで携わっていきたいと思います。関市を活発にするための具体的な案は中々いい点を突いていて興味深かったです。

【講師6】吉田 智美 先生 (メイクアップアーティスト)

自己紹介を兼ねてこれまでの人生を手書きの年表を用いて語られた。

- ・人生は選択の積み重ね

進路選択だけが選択ではない。人は毎朝起きたときから選択をして生きている。中3の時バスケの強い高校へ行こうと思ったが、親のすすめで進路選択の幅が広い関高にした。バスケ部中心の高校生活だった。県ベスト8という目標を決め達成できたので充実した高校生活だった。2年の時美術に興味を持って絵を習い始めた。皆さんも受けてみたい大学は必ず見に行こう。私はその場で感じる空気感を大切にしてきた。そして一番空気が心地よかった大学を選んだ。



大学時代に海外旅行をするようになり何カ所か行った。その中でもニューヨークの空気感が一番肌に合ったので、ぜひここに住みたいと思った。4年次9.11テロがあり卒業後すぐNYに行くのは断念し、2年地元で美術講師をした。NYへの思いは断ちがたく単身渡航。漠然とメイクアップの学校へ行こうと思っていた。徹底した現場主義で実技を習得し英語も習得できた。語学学校へ通うよりも上達できた。

確かな意思のもとメイクを習ったわけではなかったが、メイクの仕事は自分に合っており、仕事としてやっていく自信もNYの2年間で持てた。

- ・自分の10年先を見つめよう

26歳から東京でTVの仕事を中心に活動した。30歳になり、ふと40歳までこの仕事ができるのかを考えると芸能界で仕事をするのは無理があると思った。そんなことを考えていた折、東日本大震災が起きた。メイクの仕事など大災害に傷ついた人を救えないし無力だ、私の仕事は意味がないと悩んだ。だが、請われて被災地へ行きメイクをしメイクの方法を指導したら、被災者から生きる希望や復興への意思が持てたと感謝され、メイクの持つ力に気づかされた。これからは芸能人ではなく一般の人にメイクをすることを仕事にしよう。NYや東京で得たものを地元に戻元しようと2016年に関市にスタジオを開設した。自分の10年先を見つめると5年後に何をすればよいか、1年後に何をすればよいか明確になる。私はこうして自分の人生を描いてきた。

- ・目標を持つこと、感謝の気持ちを言葉にすること

目標を設定すると苦手なことや嫌なこともがんばることができる。絵が下手な私でも美大合格という目標ができたなら絵を熱心に練習できたし、英語が苦手だったがNYで暮らしたいと目標ができたなら英語も勉強できた。ぜひ目標を持って学校生活を送ってほしい。また、感謝をすることを忘れないでほしい。「ありがとう」は「有り難し」、「めったにないこと」。その反対の「ありふれたこと」に「ありがとう」と言いたい。「ありふれた」ことが実は「めったにないこと」かもしれない。今の私が在るのは両親が出会ったおかげ。私は誕生日には両親に「ありがとう」と言う。皆さんも身近なところからまず親に「ありがとう」と言ってみてほしい。

<<生徒の感想>>

とても心に突き刺さる講座でした。私も吉田先生と同じで、芸術系の大学に入って舞台や映像を学びたいので、とても真剣に聞いていました。やりたいことを口に出すことはとても大切だと改めて分かったし、私もニューヨークに留学したいと少し思いました。自分のやりたいことのために1つ1つ目標を立てて、努力していきたいと思いました。

【講師7】各務 梓菜 先生（NHK静岡放送局 スポーツキャスター）

実際にご自身が出演された番組のVTRを見せて頂き、スポーツキャスターの主な仕事の内容やキャスターとしてのやりがいをお聞かせ頂きました。

高校時代に将来の夢と出会い、自分の心の声に耳を傾け、その瞬間の思いを大切に挑み続けた各務さんの強い気持ちが夢を叶える原動力になったのだなと感じました。

○将来の夢との出会い

先生からの誘いで廃部寸前だった放送部に入部し、コンテストで全国大会入賞を果たしたことにより、はじめて自分にできることを見つけ、自分の声を伝えることの楽しさを知り、将来「アナウンサーになりたい」という夢を持つようになった。

○夢を追いかけて東京へ

早稲田大学へ進学し、アナウンサーになる為の知識や経験を積むために、放送研究部・アナウンス部に入部し、ラジオ局でのアルバイトにも励んだ。

○約1年以上続いたアナウンサー試験

周りのみんなが就職先を決めていくなかで、自分には絶対にアナウンサーになりたいという強い気持ちがあったので、一般企業には応募せず、全国各地のアナウンサーの試験を受け続けた。

その結果、卒業式の2ヶ月前に静岡放送局のスポーツキャスターでの採用が決定した。

○アナウンサーは原稿を読むだけ？

周辺取材やインタビュー、ナレーション、構成や原稿作成などさまざまな仕事内容がある。ただ原稿を読むだけでは、「ロボットでもできる」と言われてしまうので、試合観戦では、選手の細かい仕草や使いたいシーンを選別し、大まかな構成を考えながらみるようにし、試合の面白さや注目ポイントを自分で見つけていけるように心掛けている。

○皆さんへのメッセージ

- ・自分の心に従う
- ・自分のやりたいことをみつけたら挑み続ける
- ・周りの人の力をかりる
- ・最後は自分を信じて勝負！



<<生徒の感想>>

キャスターの仕事は、話を聞いてレポートするだけだと思っていたけど、構成を考えたり、アポをとったり、大変だと思う。自分の好きだと思ったことを仕事にしているすごいと思う。相手の意見を踏まえて臨機応変に構成を考えて感銘を受けました。常に相手の目を見て頷いて話を聞いていらっしやっただので、インタビューの際に、有利に働くのかと思いました。

【講師8】松居 志洋 先生（県北西部地域医療センター—国保高鷲診療所 医師）

「地域医療の現状」および「幸せ」と「働くこと」について話していただきました。先生は本校から、自治医科大学に進学されました。大学卒業後は、岐阜県総合医療センターで研修医として勤務されたのち、県内の地域医療に貢献され、現在の高鷲診療所は3つめの勤務地だそうです。

研修医のとき、NHKの医療番組「ドクターG」に出演されたそうです。現在の勤務地「高鷲町」は人口約3,000人に対して医師が2人と、県下でも医師の少ない地域であり、毎日平均40人ほどの患者が訪れるそうです。お年寄りの方が多く、診療所が心のよりどころにもなっており、治療後は丁寧に「ありがとうございました。」とお礼を言われるので、とてもやりがいがあるそうです。しかし、設備等のこともあり患者の状態によっては限界もあり、大きな病院へ送り出すこともあるそうです。



次に「幸福とは何か？」という質問を生徒に投げかけられ、どの答えも肯定し、「正解はない」と話されました。アリストテレス・ビルゲイツ・孫正義など有名な人物の言葉を引用して、「幸福の条件」について説明されました。「お金」だけでなく、「何かをやり遂げた」・「他人のために貢献できた」・「感謝された」などの「達成感を得ること」や「社会から認められること」・「家族と楽しく暮らせること」が大きな「幸福感」を生む。その最良の手段が「働くこと」であるから、自分たちが「幸せ」になるには、今後の進路選択がとても大切であると話されました。最後に「最も過酷であり、かつ無償の仕事」＝「お母さん」の動画で、講義を終わられました。改めて「幸福」とは何かを考える機会をいただきました。

<<生徒の感想>>

働く⇨幸せで、幸せには人それぞれ考えがあるけど、自分のやりがいの為や、キャリアの為に働くことで幸せが得られると私は思いました。患者さんとの距離が近いところが魅力だという話を聞いて、私は患者さんに寄り添った、気軽に話しかけやすい看護師になりたいと

思いました。